

論文要旨

氏名：小渕 尊史

論文題目：『秘蔵宝鑰』の研究 — 構造と言語表現の視座から —

空海の『秘蔵宝鑰』三巻は、『十住心論』と共に、天長七年(830)の所謂「六本宗書」の一つとして制作された。十住心思想の構図を端的に述べる当書は、真言密教の位置づけを明示する根本著作として空海の教学を代表する。かくも重要なテキストでありながら、『宝鑰』は幾つかの未解決の疑問を孕む、謎めいた性格を具す。それは

- 勅撰の宗義説明書として何故『十住心論』『宝鑰』の二つが奏上されたのか
- 『十住心論』と『宝鑰』の二書に与えられた役割の違いの本質は何か
- 『宝鑰』巻中に「十四問答」が挿入される意味は一体何か
- 第十秘密莊嚴心の大部分が、『菩提心論』三摩地段の全文引用で占められる意味は何か等の事柄であり、いずれも『宝鑰』自身の存在意義・役割の本質に関わる。

本論文は、このような疑問を考察の出発点とし、『宝鑰』という大変優れた、高品質の文章を結実させた空海の意図と工夫を発掘し、露顕させようとする試みである。即ち、空海が、嵯峨帝・淳和帝の治世下で、真言宗を開創・弘宣する活動に邁進しながら、自らの教学の大成(十住心思想)を果たした段階で、真言教理の精髓を

- どのような説論形態で
- 誰に対して
- 具体的に如何なる手法を活用しながら
- どのような語彙表現を以て
- 如何なる目的を達成する為に
- 如何なる主題を絡めながら
- どのような範囲に限定して

言語で表現したかの実態を、出来得る限り実証的に確認する作業である。

この検証を通じ、空海教学全体の中で『秘蔵宝鑰』がどのような位置付けに在るのか、その存在理由と役割の明確化を本論考の最終的な目標とする。

本論文は『秘蔵宝鑰』の「構造」・「修辞と言語表現」・「主題」の三部で構成される。

『宝鑰』の構造を述べる第一部は三章より成る。

第一章では、『宝鑰』が、複数の発話者が錯綜して多層的な言表を展開するという特異な「語り」の位相を示すことに着目し、著者空海と『宝鑰』の「表現主体」概念[テキストの内部にて言説を生成する主動因]を区別する視点を導入した。言説の主体の観点から『宝鑰』の全文を分析し、各部分の「語り手」が誰であるのかを指摘する。

第二章では、『宝鑰』の顔の見える読者[テキストの外側で言説を受容して読み解く評価認識の主体]を「天皇と文人官僚」と措定し、テキスト『宝鑰』がメッセージとして発信された対象である嵯峨帝・淳和帝と側近の官僚たちの活動の実際、及び空海との交渉を論述する。極めて高度な漢詩文の素養を具備した彼らに向け、『宝鑰』が戦略的に執筆された背景を描く。

第三章は、『宝鑰』と『十住心論』を詳細に比較する。両書記載の全要素を検証し、『十住心論』で具体的に記述される所の、真言密教の奥秘の思想、深秘釈や真言の功德、三密瑜伽行の具体的行相が、『宝鑰』では一切言及されず、越三昧耶に抵触しない範囲の記述に、空海が嚴として限定し『宝鑰』が九頭一密の浅略門に該当する実態を指摘する。

『宝鑑』の言語表現を考察する第二部は、五章より成る。

第四章では、「文」概念を、中国の古典的文章観との関わりで検証する。『文鏡秘府論』所録の複数の文章論を鍵としつつ、真善美兼用の文彩ある美文で正しい教えを説く姿勢を確認する。具体的には、名教の基としての文章が、実際に空海の手によって如何に制作され、どのように言語として定着されたかを、空海の諸著作と『宝鑑』の多くの事例を用いて観察する。分析の際には、一篇の詩文中の眼目となって、際立った輝きを発揮せしめる「秀句」という概念を導入する。

第五章では、『宝鑑』に特徴的に見出される表現方法「対句」「詩頌」「問答」について論じる。各手法の役割や中国古典での事例を踏まえ、空海の諸著作と『宝鑑』での各々の実態を網羅的に検証する。『宝鑑』が、対句構造・対句的発想・駢儷体に類した文章リズムの上に構築された、典雅美麗かつ堅牢な言語表現の粹であり、また読者の興味と便益を図る役割を果たす詩頌を効果的に使用し、知的な刺激を与えながら論点を絞り込む問答体を援用した様相を観察する。

第六章では、『宝鑑』で空海が採用した比喻表現の一例に、第四住心冒頭の「燕石濫珠璞鼠名涉」を取り上げ、この淵源と、真偽分別・浅深差別の教判に直結する次第を述べて、一つの語彙・僅かな比喻で、論の全体を一望せしめる、空海の言語表現上の卓越した妙技の例証とする。

第七章では、『宝鑑』に見出される老荘思想由来の語彙表現について論じ、『宝鑑』が読者の教養に適合する形で、老荘的な語句・概念をも包含する実際を指摘する。これは、外典(中国古典・漢籍)を典拠にする語彙表現を使用することで、『宝鑑』の読者の理解を容易にするという、文意明確化の目的を証する例証である。

第八章では、空海のテキストの語彙表現に、仏典とは別系統の流れとして、『文選』に代表される中国古典書籍・詩文が存在していることを述べ、さらに『宝鑑』中にも散見される『文選』関連の語句表現の多くの事例から影響の具体的な様態を確認する。そして、『文選』中に見出される故事・語彙表現を媒介として、空海・表現主体と読者(天皇・文人官僚)との間に確実な意味の伝達(コミュニケーション)が保証される構図を指摘する。

『宝鑑』で説かれた主要主題に焦点を当てる第三部は、四章から構成される。

第九章では、『宝鑑』冒頭で非常に強い印象を与える「生生死死」のテーマを取り上げ、「生死流転」が空海の著作で如何に取り扱われているか、また『宝鑑』全体としてどのように処理されるかを観察する。『宝鑑』の論述が進行するにつれ、生命の無常と死滅離別への痛哭を言表する表現が希薄化する。人類普遍的「生死」に関する哲学的・宗教的課題の弘遠重大さを逆説的に表明し、真言教門が生死暗黒の恐怖から衆生を救うという空海の強い確信を『宝鑑』が反映するものという論旨を展開する。

第十章では、『宝鑑』巻中の「十四問答」について、論理展開や対話者の思想的立場・行動原理など、多角的な視点を導入して考察する。玄闍法師の教説の表面的な意義の奥底に、「仏法と王法」の隠密な関係が存することを明らかにする。そして、「十四問答」の真の主題を、仏教の「鎮護国家」の効験と天皇の道徳的価値を説き述べるものと把握して、「十四問答」を空海が天皇と文人官僚に向けた、道俗(仏教と国家天皇論)混融の教令テキストであるという解釈を導き出す。

第十一章では、空海教学における『守護国経』の重要性を論じる。第九住心所説の進金剛際という密教への転換点に、『守護国経』の経文が引用される。『十住心論』を含め、十住心思想の結節点に据えられる当該経典の教学の形成上、及び国家体制内の真言宗存立基盤(鎮護国家の修法・三業度人制の金剛頂業必須の経典)の両面での意味合い、殊に国体護持という密教の公的役割に於いて顕わになる最重要の性格を考察する。

第十二章では、『宝鑑』最大の主題「心」に焦点を当てて、空海の十住心思想の教理的基盤を明

確化する。『宝鑰』では、能求菩提心・所具淨菩提心・十段階の住心・自心の仏、等々、多層的な意味を一つの「心」に包含させる。それを論理的に可能にするのが「仏のさとりを目指す心の旅」というモチーフ・動因(菩提を心に求め仏境界に心地を勝進させてゆく過程)である。『宝鑰』を有機的構造体に仕立て上げる「心の探求」を、特に「自心の仏」「心を開く曼荼羅」の観点から検討して、『宝鑰』の到達点を測定する。それは、第十秘密莊嚴心という秘密宝蔵へと到る旅の終わりは、自心の曼荼羅を開いてそこに如実に仏の姿を見ると旅程表には記されるが、実際はその金胎両部曼荼羅に渉入する具体的な方法は明かされないという、真言浅略門の秘密の制限に逢着するのである。

これらの全十二章の記述によって、『秘蔵宝鑰』が

- ※漢詩文の教養を誇る天皇・文人官僚の為に
- ※密教の奥義の部分を隠し通したまま真言密教の優位を説き述べ
- ※かつ国家における仏教の必要性を思想的に論証する

著作であり、読者の理解と共感を得るために

- ※対句と典籍由来の故事・語句を駆使した秀句(美文)と
- ※詩頌・問答・比喩などの手法を活用して
- ※経論の証文を巧みに取り込んだ、自在な語り口の技巧を極めた文章表現を達成し

その結果、『宝鑰』が具有する主題

- ※仏のさとりに向かって心が深化してゆく「旅路」と
- ※生死流転を離脱して涅槃の彼岸に到達できる希望

を読者の心に刻み込む効果を論述した。

即ち、『秘蔵宝鑰』は、真言密教の存在意義を宣揚する、勝れた伝法の書であるという結論が導き出されたのである。それは、同時に、本論考の出発点となった四つの疑問に対し

- ★『十住心論』は密教の灌頂を受けたものへの奥義の書、『宝鑰』は天皇や文人官僚向けに書かれた概説書という、対象の明確な違いが存する
- ★『十住心論』は密教の学理的基礎文献集の役割を持ち、一方『宝鑰』は未灌頂の者への密教の優位を告げる案内の書という役割の違いが存する
- ★「十四問答」は、国家における仏教の有用性を説く裏側に、国家(天皇)が仏教僧及び俗儒(官吏)に期待する行動規範を逆説的に提示した、統治原則の綱要の役割を果たす
- ★『菩提心論』引用文は、真言門の瑜伽三摩地や観法・印明の具体を記載せずに、手際よく心の旅の主題に適合する淨菩提心追求の「心の探求」過程が述べられ、『宝鑰』の開示しようとする秘密のレベルに即同するが故に、第十住心に配置された

という解答を結果的にもたらすものである。

以上